

先輩と我々

蠶一 佐藤馨

「先輩は實に有難いものだ」と云ふ言葉は今迄随分聞かされた言葉だ。

併し不幸にして私は今迄「先輩の有難さなるものを實際に體驗した事がない。又恥しい次第だが中學の先輩として後輩達に有難がらせるやうな事をしてやつた事がない。

それはお前が求めないからだと叱られるかも知れない。然し後輩に陰徳を施す事は或は怠るかも知れない私も、先輩の御利益なら人一倍預りたい心持は多分にある積りだ。吾々は「先輩」と云ふ無形なる言葉を求め探してゐるのではない。眼前に生々として實在し求めれば何時でも求め得る「先輩」を望んでゐるのだ。

然し不幸にして見當らなかつた。

ここに於て「先輩」なるものを一種の無用の長物視し果ては其存在をも否定するやうになつた。

併し今夏白健濟君と實習生として熊本へ參り始めて所謂「先輩の有難味」なるものをしみじみと感じた。

堂々たる天晴既成實業家たる校友諸氏が吾々未完成なる青二才を、然も一面識もなき吾々を單に同じ學校に學んだと云ふ極めて淺く見える縁を以て真心から一夜歡待して下さつた御心に對し涙ぐましい程しみじみと有難味を感じた。

慈父兄の如き先輩諸氏を敬遠且否定してゐた吾が心が今更ながら恥しい。今迄は眞に求めて居なかつたのだ。

先輩は丁度芋蔓のやうだ。たぐればたぐる程求むれば求むる程何所までも吾々に好意と親切を以て接近するものだ。途中で蔓の切れるのは此方が悪いのだ。

以下簡單に歡迎會内容を記述的に誌し、先輩の存在を否定してゐる人がありとすればこの拙文によりて幾分でも先輩の

有難味なるものを諒解せられ延いては同窓生對在校生の親交を計る事が出来るならば私の幸甚とする所である。

台灣よりも暑いとの定評ある熊本は夏は熊本市民でさへも凌ぎ難いさうである。然も夏の盛りの七月廿八日殆んど毎日九十度を突破する暑さ實に石をも熔かすとはこの事だ。それでも日が沈むと涼風も吹き幾分は凌ぎよくなる。午後七時一日の仕事を終り早速馳せつけた場所は熊本第一の歡樂境上通りその第一流の料理屋へ會するもの同窓生五名（町田氏は都合により不參）吾々三名私と白健濟君と肥後製絲へ實習に出てゐられた製絲三年の永山君）少數なりと云へども意氣既に天を衝き談論風發校長先生を始めとして各先生方の近況學校の模様、果ては同窓生諸氏の學生時代の茶目振りと、皆昔の學生時代の心に歸り想ひは遠く上田の地に馳せ、話しは話しを生み男女問題から思想問題にまで脱線した。その間にビールが出る幾皿もの洋食が出る果物、コーヒー等々と次から次へと出る山海の珍味に舌鼓みを打ち乍ら誠に愉快な有益なる一夜を過した。次に當日御出席になりし校友諸氏を御紹介すると福谷朝太郎氏（蠶一）熊本農業學校に教鞭を取られ温厚篤實なる君子にして尙健傘公民學校にも兼務せられ奏任待遇の教諭である。同窓會南部支部長として後輩の指導に熱心に従事されてゐる。

太田慎一郎氏（蠶六）國立蠶業試驗場熊本出張所に在勤せられ新品種の造成並びに遺傳の御研究に餘念ない快活にして談論風發の慨ある人である。

中嶋文雄氏（蠶九）限府町蠶業取締支所長として活躍せらる。温厚にして名支所長の定評あり。

小林重男氏（蠶十五）縣立蠶業試驗場に勤務せられ専ら桑樹試験を熱心に擔當せらる。

遠藤榮一君（絲十五）肥後製絲會社に熱心に勤務せらる。

其他菊地蠶業學校に教鞭を取られる町田正直氏（蠶十四）外三四氏あり、いづれも面會出来なかつたことは残念である。想ふに九州の蠶業は熊本大楠場長の指導良しきを得て熊本を中心として年々恐しき勢にて發達普及しつゝありと云へども、未だその頂きに達せず内地に比すれば宛かも未開地の感がある。

氣候酷暑多濕なりと雖も既に一化性飼育に成功せりと云ふ。現に私の實習先長野製種組にては夏秋兩季に一化性飼育し立派な成績を上げてゐる。

更に勞賃は幾分か安くして加ふるに多濕なる氣候は桑樹の繁茂を促し養蠶經營に重大關係を有する收穫量を示すならば次の如し。

項目	熊本縣蠶業試驗場調査			國立蠶業試驗場 熊本出張所
	春	秋	合計	
品 種				
市 平	二六三	三八九	六五二	二四四
春 日	二九三	五四	六四七	……
改良 鼠 返	二五一	四四二	六九三	二六五
改良早生十文字	二四〇	三三九	五七九	二七九
白 芽 魯 桑	二六三	三八四	六四七	二三二
赤 芽 魯 桑	二三五	三七一	六〇六	二三一
隆 撰	三四七	四六〇	八〇七	……

且之れに加ふるに九州人の心のよき事である。五十日と云ふ可なり長い日數の間蒸熱、雨窓扶斯、肺病等々皆吾々に好印象を残さなかつた熊本に唯一つなつかしいのは實に熊本市民の朴訥正直であつた。

如斯九州は養蠶經營の具備すべき諸要素を多分に有してゐるにも係らず我同窓の數に至つては僅かにして従つて活動も微々たるものである。

然も九州民は上田卒業生を他の専門學校卒業生より以上好意を以て歡迎して呉れる點に注目しなければならぬ。今後吾校の發展に重大なる役割を演ずるものは同窓生諸氏と在校生との間の快いコンビネーションであると信ずる。無論頭のよい事も必要條件である併し一人や二人の先覺者、識者、指導者が現はれて努力して見た所で容易に其目的は達せられない之を達する爲にはどうしてもそれ等の人々の實現と御骨折りと共に又其人達を圍む大衆を必要とするのである。

最早現代は一人のナポレオンや豊太閤を出す事丈では満足出來ぬ。それよりも同窓生と在校生が打つて一丸となり一致協力二身一体不可分の状態となつて努力する方がどれ丈偉大な力となるか知れない。

在校生諸氏よ内地の行きつまれる蠶業にあき足らずさりとて遠大の理想を抱いて南米、支那、朝鮮に雄飛するにはあまりに膽の小さきものはこの新興地九州を目指し既に在住活動なされてゐる同窓生諸氏の熱心なる御指導御援助により今後益々九州方面に吾校の勢力を樹立せん事を切に希望する。

終りに實習中一方ならぬ御世話下されし同窓生諸氏殊に終始御指導御鞭撻下されし小林遠藤兩氏に深厚なる謝意を表して稿を閉ぐ。 (1928.11.20) K S 生